第９回「ナオの南風語り」用　　２０１０年６月

「のたうち回る　その２」

模範解答を探そう

我々は時代の落し子である。
「主体は時代と装置によって産み出される」とは、ポール・ヴェーヌならずとも、吐くであろうコトバである。ミッシェル・フーコーの平明な解説書を書いた人として知られている。

どの国であれ、どの地域であれ、揺るぎなく連綿と続く歴史があるわけではない。とぎれとぎれの、しかも、狭い区域ごとのできごとを繋げた歴史があるだけである。もしかしたら、個人史だけがあるのかも知れない。学校の教科書に載るような、一見、流れがある歴史はない。夏目漱石の『それから』に登場する先生の家の晩餐の食卓には、食後のデザートとして、アイスクリームが並ぶ。すでに電気が起こされていて、製氷施設があったということである。明治三十年代のことである。

同時代のトカラではどうか。わたしが親しく教えを請うた永田常彦ジイ（トカラ諸島の中之島の人で、明治二十五年・一八九二年生まれ）は、年に一度の（稀には二度ということもあったが、）楽しみは、鹿児島本土からもたらされるあめ玉であった。それはそれは、待ち遠しいみやげの品であった。父親たちが帆船を繰って鹿児島にカツオ節を売りに出るのだが、その交易船を藩政時代の名を踏襲して、年貢船と呼んでいた。常彦少年にとって、何ヶ月ぶりかで島に帰ってくる年貢船が、街のハイカラな食文化をもたらしてくれる。

島でアイスクリームが口にはいるのは、ずっと後になる。大型発電機がもたらされ、冷蔵庫が普及してからだから、昭和三十年代の終わり近くなってからだった。先生の舌先に乗ってからでは、七十年の時間のズレがある。もっとも、これは中之島でのことであり、発電機の導入時が遅れる他島では、それよりもさらに後の出来事となる。

このように、同時代ではあっても、個々人の体験には大きな開きがみられる。地域や事象を一律に語れるものはない。重箱の隅をつつくような思いで、個々の事象をより詳細に語り、それらが互いに摩擦や融合をくり返し、”化学変化”したものをとらえるのが、歴史家の仕事であろうかと思う。

それゆえに、現在の問題を解決する方法を、別の時代に出された回答（結果）のうちに見出されることは決してない。現在と過去、あるいは、別の時代に共通するものといえば、それは、「どのような生であっても、模範解答は存在しない」ということである。だからこそ、「のたうち回る」のである。それこそがまぎれもない生であり、生きている証（あか）しである。

（裏面に続く）

早く後ろ指をさされる人間になろう

キチガイとキチガイでない人間との境ははっきりしていない。天才と狂人との差は紙一重だ、とも言われている。「天才とは、狂気が持続しない狂人で、狂人は狂気が持続している天才」と定義したのは、渡辺一雄である。エラスムスの『痴愚神礼讃』や、ラブレーの『パンダグリュイエル物語』を訳した仏文学者である。

「感動」とか「感激」というコトバがあるが、そのコトバ自体には「狂気」の翳が潜んでいる。健全で正気な生活を送っているつもりの我々が、フッと気づくと、我を忘れて興奮しているのだった。その興奮は瞬間には消えない。もしかすると、生涯にわたる、なにかの契機となる可能性も含んでいる。「我を忘れる」ほどの狂気ぶりだからこそ、「感動」などという過激なコトバを吐いても、聞いている側には抵抗がない。また、吐く人が狂気に捕らえらにくいと思われている人ほど、聞く側は大きな衝撃を受ける。

近ごろの巷の会話に、「感動を得た」が頻繁に出てくる。話している人は気持を昂ぶらせることもなく、平常心で吐いている場合が多い。そのコトバからは正気こそ伝わってきても、少しも、「我を忘れる」狂気が伝わってこない。たとえば、サッカーの試合を観戦して「感動を得る」のなら、競技場を後にした、帰りの電車の中は狂気が充満していているはずである。多量の血を見たとて不思議ではない。それが、行儀良く帰宅できるのだから、「感動を得た」のではなくて、自分の感性の敏感さを伝えたいための、自讃に過ぎない。辞書に載る「感動」の項目の説明内容を置換する必要がでてきた。「狂気」ひとつを取り上げても、一貫した歴史を読みとることは難しい。

先の置換が定着してくると、「狂気」の重みは減量されるのだが、使う側としては気楽である。われわれは安心して「狂気」を発揮することができる。一日も早く「ひとさまに後ろ指をされる人間になりましょう」と、誘っても、さして指弾されないですむ。

しかし、この誘い文句は本来、狂気から出たものではなくて、「結論を得たいがための」まっとうな動機から出たコトバである。以前にも触れたことだが、地べたに近いほど、モノを観る特等席に近いのである。「モノを観たい」という欲は、どこかで、「結論があるのではないか」という期待がはたらいている。

後ろ指をさされるということは、周囲からの評価を下げる、と同義だが、これこそ、己をあらゆる呪縛から解き放つ基点になる。「あいつはダメだ」という評価が起爆剤となって、「しょうがいない、ダメな奴だから教えてやるか」という雰囲気が周囲に立ち上がれば、しめたものである。高みに位置する人間には獲得できない「モノを観る」特等席の切符を手にすることができる。

これから先が正念場である。「のたうち回る」場で用意されたのだから、「結論があるかも知れない」という甘い誘いを追いかけて、どこまでも行くがよい。崖っぷちに行き当たり、冷や汗をかくこともあろう。天使に懐深く抱かれて、やすらかな一夜を過ごすこともあろう。何が前方に待っているかは、誰も分からない。だから生きていられるのである。